

「大・南大萱展—瀬田のいまむかし」 開催のねらいといきさつ

吉村 文成

「……私がこの戦時中のことを紹介するコーナーの戦死された方々の写真が展示されているところにいたとき、隣にいた御老婦人がずっと写真を見ながら、時々こっそり涙を流していた。きっと同じ戦時中をここで過ごした方なんだろう。とても胸が締め付けられた。こんなに戦争を体で感じたことはない。この私が今生きている地域の大萱の町も、『はだしのゲン』や学校で習った戦争と、同じ時代を生きて、私が遠いことのように感じていた悲しみや苦しみを味わったのだと感じた。

こんなに歴史を身近に、自分とのつながりを感じたのは初めてだった」

(国際文化学部 4回生 女子)

里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター（以下『里山学ORC』と略記）の研究員として、2006年夏から冬にかけて、大津市東部・瀬田地区のため池調査を実施した。このため池調査が、『大・南大萱展—瀬田のいまむかし』を開催することになったきっかけである。展覧会が開催に至った経緯を説明しようとするれば、どうしても、この調査のことから始めなければならない。

JR線瀬田駅から龍谷大学瀬田学舎にむけて「学園通り」をバスで行くと、東海道新幹線のガードをくぐり傾斜がいくぶんきつくなるあたりで、東側に水を満々と湛えた大きなため池がある。あるいは、瀬田学舎から深草学舎への往還に利用する大学のバスが名神高速道路を通るとき、両側にため池が点在するのに気づく。このように、瀬田丘陵から北西の琵琶湖側に伸びる傾斜地には、大小のため池が多い。

わたしが瀬田地区のため池に関心をもつようになったのは、「里山学ORC」が発足した2004年度当初のことである。そのころ、「里山学ORC」の研究員には加わったものの、

漠然と自然の中を歩きたいという気持ちがあるだけで、きちんと研究テーマを決めていたわけではなかった。まだ、コバノミツバツツジの紅色の花が残っていたから、4月のことだ。地元の方たちといっしょに現地を回る「『龍谷の森』里山保全の会」の会合で、たまたま参加していらっしゃった、大津市環境保全課の大西政章主幹（環境保全係長）にたずねた。

「このあたりのことで、人文科学という面から、面白そうなテーマは何でしょうね」
大西さんはちょっと考えて答えた。

「ため池なんか、面白いのではないですか」

それから、ため池のことを意識するようになった。実際に地域を歩いてみると、あちこちでため池にぶつかる。瀬田学舎から瀬田駅まで、ちょっと回り道をして文化ゾーンや自然公園を抜けていだけで、上長尾池や下長尾池、大池（石拾池）などのため池がある。

しかし、同じ2004年度から学部執行部に「キャリア開発主任」がはいることになり、その立場から執行部会議に参加したり、あるいは2005年にキャリア開発科目『現代社会と経営—社長さんの大学講義』を開設したりといった学務に忙殺されていた。まったく別のやりかけの研究もあり、ため池調査はついつい後回しになっていた。

とはいえ、いつまでも放置しておくわけにもいかない。2006年6月、文学部の土屋和三「里山学ORC」研究員に「どうなっていますか」と声をかけられたこともあって、ようやくため池調査に腰を上げた。

調査の結果は、「里山学ORC」の2006年度報告書（2007年6月刊行）に『畠田（はたけだ）の発見——大津市東部地区のため池調査から』として報告した通りである。概略を紹介すると、以下のようにまとめられる。

- ① この地区では、田（たんぼ＝水田）は、琵琶湖に近い平地にある「本田」と、瀬田丘陵から平地にいたる傾斜地にある「畠田」に分類される
- ② 「本田」は琵琶湖に近い平地にある水田であり、奈良期に始まる「条里田」に加えて、江戸期に琵琶湖の干拓によって生まれた水田などが含まれる。地下帯水層が地表近くまである、いわば「湿った田」である。
- ③ それに対し「畠田」は、瀬田丘陵の北西に伸びる傾斜地にある水田であり、ため池を築き、そこから水路網を広げるかたちで江戸時代にはいって開拓された。常に干害つまり水不足の危険にさらされる限界的な水田であり、いわば「乾いた田」である。

- ④ 民俗学などの分野で「ハタケダ」という場合、これまで、「ヤシキダ」などという言葉と並んで、その田の由来を示す言葉としていわれてきた。しかし、瀬田地区という「畠田」は、「本田」という言葉と対置していわれていることから明らかなように、田の類型を表している。
- ⑤ これまで日本の水田稲作の発展史としては、谷間の湿地に植えた「谷地田」に始まり、比較的水路の作りやすい扇状地の開拓、そして、戦国から江戸時代初期にかけての近世初期に大規模に展開された、河川の上流から水路を開く沖積平野の水田化——という順序で語られてきた。いわば「湿った田」の造成を中心とした語りである。しかしながら、瀬田地区でいう「畠田」は、江戸期にはいつてから、ため池を築き、少しずつ高度を上げてゆくかたちで開拓されている。それは、いわば本来的には「乾燥した台地」のため池造成による水田化であり、上述した水田発展史からは抜け落ちているのではないか。
- ⑥ 同じようなため池灌漑による水田の開拓は、香川県の満濃池、大阪府の狭山池、鶴田池などに見られるように、近畿から瀬戸内海一帯では、古くから相当に広がっていたことが観察できる。そうであれば、「畠田」という概念は、西日本を中心に古代から近世まで連続と続けられてきた、乾燥した台地の水田化形態として認知される必要があるのではないか。

「畠田」という概念は、わたし個人としていえば、調査に着手する前の段階では思ってもいなかったことであり、いわゆる「棚田」との比較など今後も考察しなければならない問題はあるが、きわめて興味深い成果だったと思っている。しかし、ここでその問題に深入りするのとは、この小文の本旨ではない。

『大・南大萱展』との関連をいうなら、この展覧会が開催されることになったのは、ため池調査を通して、「畠田」と並び、いや、それ以上に貴重で重要なふたつの「発見」があったからだ、ということができる。

そのひとつは、南大萱という土地のもつ、自然と歴史の豊かさである。琵琶湖岸から瀬田丘陵まで長さ4キロ、幅1キロ、面積にして4平方キロほどのわずかな土地に、琵琶湖という「水」の世界から、瀬田丘陵という「山」の世界まで、多様な環境が凝縮されている。その多様な環境に合わせて、生活のスタイルも決して一様ではない。さきほど

ふれた『畠田』という概念に気づくことができたのも、こうした多様な環境が凝縮された中で、さまざまな水田の運営についての比較対照が容易だったことが大きい、とわたしは考えている。

いまひとつの重要な発見は、今回、展覧会の開催について協力をお願いした「南大萱資料室（松田庄司室長）」そのものである。実をいえば、南大萱の自然と歴史の豊かさ、環境の多様性などに気づくことができたのも、「南大萱資料室」に大きく負っている。事務所は、瀬田駅北側約50メートルのところにある大萱会館の3階の一隅を占める。

南大萱資料室の前史は、平成2年にさかのぼる。この年、自治会で保管されてきた古文書やその他の資料の散逸を防ぐため、「南大萱資料調査保存会」が結成され、古文書の解読や資料の整理が始まった。次の段階は、平成13年3月に発足した「南大萱史編纂室」である。平成16年5月、同編纂室の手で、全447ページにおよぶ『南大萱史』が刊行された。

同書の刊行後、かつての「編纂室」は、「南大萱資料室」とその名を変える。新しい仕事は、自元大萱にある歴史資料の保管、発掘、整理などである。

同資料室は、毎年11月に開かれる大津市の文化祭（瀬田北学区および瀬田東学区）では、さまざまな企画展を開催している。たとえば、平成18年11月の瀬田北学区文化祭では「南大萱のむかしと今展」と題して、①源内峠鉄鉱炉模型 ②南大萱のお店・昔と今 ③南大萱に伝わる昔の道具類 ④南大萱をスケッチで見る——の4つの展示を行っている。

このうち②の「南大萱のお店・昔と今」は、現在の商店の分布図とならべて、90歳を過ぎた老婦人の記憶をもとに作成した、かつて地域にあった商店の所在地の分布図を展示したものである。また、④の「南大萱をスケッチで見る」は、メンバーの一人である国松巖太郎さんの水彩によるスケッチである。

ここ3年、毎年8月15日の終戦記念日に開いてきた「戦争の記憶展」も特筆すべきものである。

06年のその日、わたしは会場の南大萱会館を訪れた。

戦後の苦しい時代のニュース映画が上映されていた。そして、壁に、日露戦争から第二次世界大戦まで、南大萱から出征して戦死した若者たちの顔写真が展示されていた。わたしが教えている龍谷大学の学生たちと変わらぬ年齢の若者たち——。そのリアルさが、戦争の悲惨をまざまざと伝えている。

若者たちが死亡した場所も一人ひとり地図に示されている。当然、アジア太平洋の広

い範囲に散らばっているのだが、かえって、そのことがこの戦争が世界にとってどのような意味をもっていたかを雄弁に物語る。

そのほか、同資料室は、小中学校への資料提供、老人会その他の各種団体での展示や講演などの活動をしている。

いうまでもないが、南大萱資料室の活動について、以上のようなことを最初から知っていたわけではない。だが、『南大萱史』を一度目にした以上、この地域について調べるとすれば、まず同資料室に連絡を取るのには、自然な成り行きである。

それほど、『南大萱史』の出来栄は印象的だった。古代遺跡から始まって現代まで、地域についての記載は広範囲で、資料も豊富だ。そのうえ、写真や挿絵、グラフなどもふんだんに使われ、きわめて分かりやすい。それがすべて、“素人”の手でつくられた。近世の大萱についての記述を受け持った田中三郎さんの場合でいえば、古文書の解読は、企業を定年退職した後、カルチャーセンターなどで学んだ、という。一冊の地域史だが、そうした情熱と能力、そして、理解してもらおうという熱意がはっきりと感じられた。

ため池調査に着手することを決め、同資料室に出入りするようになった。そして、同資料室がこれまでに作成した地域のジオラマや、源内山遺跡の溶鉱炉模型、図表や解説のパネル、国松さんのスケッチなどを見せていただいた。古文書も見た。「すごい集団」というのが、わたしの印象だった。そのことを、土屋和三さんに伝えた。

2006年7月20日、まだ調査を始めたばかりのところだが、同資料室のメンバーに同行していただいて、わたしと土屋和三さんで、実際に、地域のため池めぐりを行った。

松田室長以下、資料室の8人のメンバー全員が出動してくださり、4台の車に分乗して地域のため池を回った。焼けるように暑い日だった。わたしは室員の方の用意してくださった麦わら帽を借りた。

石拾池（大池）、水汲み喧嘩場、丸尾池、月輪大池、山ノ神池、下月輪池、そして、かつて琵琶湖の水をポンプでくみ上げて山間のため池に運んだ「琵琶湖逆水事業」のための取水口となった久保江浜の入江を見て回った。途中立ち寄った瀬田東支所では、熊谷由美子支所長の好意で冷たいお茶のサービスを受けた。

瀬田駅に戻ったときには、陽が落ちかけていた。松田さんの運転する車から降りる寸前にわたしはたずねた。

「展覧会、やってみますか？ まだ確定的にはいえませんが・・・」

松田さんの返事は、あっさりしたものだった。

「いいですよ」

わたしは続けた。

「教室での講義も、お願いすることになるかもしれません」

またしても、平然とした様子の返事が返ってきた。

「いいですよ」

そのときから、「大・南大萱展」は開催に向けて動き出した。

ここに触れたように、「大・南大萱展」の構想は、ため池調査を通した南大萱資料室との付き合いの中で出てきたものである。しかし、もうひとつ、触れておかなければならないことがある。実をいうと、そのころ、わたしの側にも、国際文化学部部の執行部の一員として、何か、そういうイベントを考えなければならない事情があった。

そのころ国際文化学部は、2007年度から予定しているカリキュラム改革を明示的に打ち出すために、対外的にアピールできるイベントを打つ必要に迫られていた。そして、執行部会で、その役を割り振られたのが、わたしだったのである。わたしはその前年度、キャリア開発主任として「現代社会と経営―社長さんの大学講義」という講義を立ち上げていた。滋賀県内の中小企業の社長さんたちにオムニバスで講義していただくのである。さいわい、この試みは学生たちにも好評で、すでに講義内容は『働くということ―社長さんの大学講義』というタイトルで、京都の文理閣から出版されていた。

この講義の内容は2006年度からは、情報メディアセンターの協力で、インターネットでいつでも（オンデマンド）見られるようになった。

この授業をなんとか補強すれば、新規イベントとして打ち出せるのではないか、という判断が学部執行部にあった。だが、どのようにして補強できるだろうか？

そういうときに出会ったのが、南大萱資料室であり、そこに集う人々である。

たとえば、先に紹介した田中三郎さんは、定年退職後に古文書の解読を学習したという。あるいは、室長の松田庄司さんによると、終戦からまもないころ、京都までリアカーをひいて下肥えの汲み取りに行った、という。その後、企業にはいった松田さんは、海外各地で工場建設を受け持ってきている。

「水質検査に行った井戸のそばに、コブラがとぐろを巻いているんですよ」

そんな個人の経験談を含めて、地域の歴史や風俗について、学生たちに話していただきたい、とわたしは考えるようになった。

いわば「現代社会と経営」の地域社会編である。二つの科目を合わせて、いずれもオンデマンドで流す。世界中どこでも見られるのだから、その英語版も作成しよう――。

「大・南大萱展」の構想は、この新講義との組み合わせの中で出てきたものである。

さいわい、南大萱資料室はこれまでもさまざまなテーマ展を開催してきている。それらを統合した大規模な展覧会を開いていただこう。そうすれば、大学と地域社会の距離が縮まるだけでなく、学生たちにとっては、身近な地域社会についての、さまざまな“気づき”のきっかけになるだろう。

この構想の根底にあったのは、ローカルこそ世界に通じる、という考えである。すでに実施している「現代社会と経営」は、滋賀県内の経営者の方たちによる講義である。いわゆる大企業でない。地元の、いわば顔の見える経営者たちだ。南大萱資料室なら、滋賀県どころではない。もっと徹底的にローカルだ。

そして、わたしの考えでは、ローカルこそが世界に通じるものだ。

わたしたちは、文化や社会について学んだり教えたりしながら、つい、国家を単位に考えやすい。しかし、国家を単位に考える場合、しばしば、細部が忘れられ、「親と反」あるいは「好と嫌」でくられる、あきあきするような単純化に陥ることがある。たとえば、昨年春、中国で吹きまわった「反日」の嵐であり、あるいは、それに対応するように日本の一部に広がった「嫌中」ムードである。

それに対して、個人や地域は、目に見え、実体を意識しやすいという点で、徹底的に細部である。そして、文学作品や映画などのことを考えればわかるように、「共感」とはそのような細部でこそ生まれるものなのだ。

例をあげよう。

滋賀県の中小企業経営者らが、それぞれの会社経営を必死に頑張っている姿は、やはり同じように会社経営に腐心している中国や韓国、いや、世界中の中小企業経営者らとそのまま通じ合うだろう。これは、実際に、経営者たちの講義を聴いて、わたし自身が確信するようになったことだ。

仮に南大萱資料室の方々に講義をしていただくとすれば、そこでも同じことがいえる

はずだ。

南大萱資料室がこれまでにまとめた膨大な資料のなかには、舗装道路もなく藁ぶき屋根に居住していた、いってみれば貧しかった過去の姿を伝えるものも少なくない。わたしはかつてインドやインドネシアなどを仕事の場としていたことがある。ああした、いわゆる発展途上国の人々がもしかつての南大萱の姿を知れば、そこに素直な共感が育つのではないだろうか。

また、前に紹介した「戦争の記憶展」で展示された戦死した若者たちの写真は、戦争を戦ったどちらの側にも、若くして死んでいった多くの犠牲者がいたこと、そして、それを悲しんだ多くの親や兄弟、あるいは恋人がいたことを、重い事実として突き付けている。それは、国家を超えて、人と人のあいだに新しい共感を育てることになるだろう。学生たちに対する、ある種の“気づき”への期待もあった。これは、いいかえれば、わたし自身がため池調査を通じて気づき、発見した南大萱という「地域」を、学生たちにもまた、発見してほしい、という思いだ。

外国留学から帰ってきた学生たちがよく、こういうことをいう。

「留学してみて、日本について知らなかったことがわかった。もっと、日本について勉強したい」

それはそれで、留学したことによる気づきとして重要なことだ。だが、日本について勉強する、とはどういうことか。どのようにすれば、日本について学べるのか。

もちろん、講義に出席し、本を読む、というのが王道だろう。現実には、わたしたちは大学で、日本のさまざまな側面について教えている。

しかし、その一方で、歴史や文化が講義や本の中のことだと思われるのはたまらない、という思いがある。歴史も文化も、現実には、わたしたちの内部に、そして、身の回りにあるものなのだ。

瀬田駅から瀬田学舎に至る通学路を含む南大萱は、学生たちにとって、日常的に接する身近な世界である。同時に、大部分の学生にとって、ふだん、何を意識することもなく通り過ぎていて、ごく小さな世界でもある。

そんな小さな世界であるからこそ、そこにある歴史や文化は、かえって肌に感じることができるはずだ。そして、その小さな世界のさまざまな動きが、実は、それぞれの時代の世界の動きに連動している——そんな世界や歴史のありようについて、展覧会を通

して気づいてほしい。

イベントの計画は、国際文化学部の実行部を中心にして進んだ。

- ① 2007年度前期は、前年度どおり「現代社会と経営」の授業を続ける。しかし、追加として、オンデマンドに英語のテロップのついた「英語版」をつくる。世界のあちこちで、日本の地方の経営者が頑張っている姿を、そして、経営に向けた真摯な姿勢を見せよう。
- ② 後期については、カリキュラム改革でわたしが新しく担当することになっている「社会人類学」の副題を「瀬田に学ぶ」とし、南大萱資料室の方々に、地域の歴史や民俗、あるいは、たとえば古文書解読の学習の経験などについて、オムニバスで講義していただく。
- ③ 「社会人類学——瀬田に学ぶ」も、いきなりオンデマンドで配信し、08年度には、「現代社会と経営」と同じように、英語のテロップ付き版で講義内容を、世界中だれでも見られるようにする。
- ④ あわせて、07年度前期に、南大萱資料室による展覧会を開催する。

——展覧会『大・南大萱展—瀬田のいまむかし』の開催は、以上のような全体構想の中で計画されたものである。関連する2つの講義はわたしが担当するが、展覧会については、須藤護・前学部長が責任者を引き受けてくださることになった。須藤教授は、民俗学を専門とし、これまで里山ORCの研究者として比叡山麓の仰木、瀬田丘陵南側の田上などについて現地調査をしてきただけでなく、学部のカリキュラム改革にあたって「京都学・近江学」を強く主張してきている。

会場については、龍谷エクステンション・センター（REC）の講義が本格化する以前の4月に開催するという条件付きで、瀬田学舎のRECホールの使用が許された。

構想はあっても、予算がつかなければ、実現は難しい。どうなるか不透明なまま、南大萱室には、須藤教授とともに、10月の段階で正式に準備をお願いした。どなたも不平はおっしゃらなかったが、内心では、ほんとうに開催できるだろうかという不安を感じていらしかったのではないかと。松田室長の依頼で、高学部長に展覧会開催について大津市瀬田北学区連合自治会長・久保義孝様あてに展覧会開催についての協力依頼状を出していただいたのが、11月末である。

07年度予算でほぼ認められる見通しがついたのは、07年にはいつからだった。

わたしも須藤護教授も、国際文化学部に属しているが、同時に「里山学ORC」の研究員でもある。そして、展覧会の開催自体が、「里山学ORC」研究員としてのため池調査を出発点としている。なにより、地域とのつながりは龍谷大学の理念であるだけでなく、「里山学ORC」の理念であり、これまで実践してきたことだ。さらにいえば、今後の研究活動の展開は、自然科学、人文科学のいずれにも人材をそろえた「里山学ORC」に頼るしかない。

わたしにとって、この展覧会が「里山学ORC」と国際文化学部の共催となるのは、ごく自然なことだった。というより、わたしの意識の中では、展覧会はため池調査の延長であり、「里山学ORC」研究員としての仕事の一部でもあった。

以前から紹介していた土屋先生、須藤先生は別にして、「里山学ORC」のメンバーを南大萱資料室に紹介したのは、07年2月19日である。宮浦富保「里山学ORC」センター長、谷垣岳人研究員、蔭山歩さん、それに須藤研究員とわたしが南大萱資料室を訪れ、話し合いを持った。

年度末のあわただしい時期だったが、3月15日に「里山学ORC」運営会議が持ち回りで開かれ国際文化学部との共催事業とすることが正式に認められた。

ポスターやチラシの印刷、配布、受付体制の整備など、そのあとの展開は、国際シンポジウムの開催などで催しものについての経験の深い「里山学ORC」の執行部、研究スタッフ、事務部門などに全面的に負っている。

この展覧会について、わたしの教えているすべてのクラス（『ユーラシア大陸の歴史と文化B』『現代社会と経営—社長さんの大学講義』および『演習』Ⅲ、Ⅳ、『基礎演習』）の学生たち全員に『大・南大萱展——瀬田のいまむかし』の見学を義務付け、そこで気づいたことについて「わたしの発見」としてレポートを提出するように求めている。冒頭の文章は、その求めに応じて出されたレポートの一部である。

他の例をいくつか紹介しよう。

「……南大萱がどのように変化してきたか、少しだけ分かった。世界という大きな範囲で物事を見ずに、小さな範囲での環境の変化を細かく見てゆくことで、大きな環境変化の基本を知るために役立ったのではないかと思う。この変化と同じようなことが、さ

まざまな場所で起こり、今の私たちの社会を作っているのだと気付かされた」

「……なんとなくだが、“暗記科目”としてこれまで接していた歴史に対する考え方が変わった気がする。教科書に載っていることだけが歴史なのではなく、自分と身近な地域にもいろいろな“歴史”があることを忘れないようにしたい」

「アジア諸国に大戦で犠牲になった日本兵士が数多くいて、非常に悲しく思いながら、心の中で、戦争というものは恐ろしいものであり、戦争によって一体どちらが儲かるのかという絶望的な気持ちになった」(カンボジアからの留学生)

「この土地についても詳しく知ることができたけれど、それ以上に日本の歴史を身近に感じることができました。自分の身近にある地域を知ることは、時代を近く感じることだができるのだとおもいました」

「……瀬田キャンパスまで他県の自宅から通っている私にとって大萱という地域はバスで素通りするだけの場所だ。けれどこの展示会では会場からすぐその極く限られた狭い地域に焦点を絞っているためか、縁遠いはずの大萱にも積み重ねられてきた過去があるのだということを強く感じ取ることができた。その狭い地域の歴史とは、私たちが遠い世界のことのようを感じてしまっている権力者たちの歴史よりも民衆の生活が直接生み出す歴史だ。……」

「住んでいる近くの大きな人工池が何のためにあるのか、やっと謎が解けた」

「私は瀬田を愛している人が多くいるということを実感しました。解説をしてくれるおじさんは、すごく活き活きと話をしてくれました」

「最後に、なによりも、熱心に自分たちの地域の歴史を振り返り、それを将来に伝えようとしていている南大萱資料室の方々がいっぱいということが大きな発見でした。私も出身地を大切に、その歴史を将来に伝えていけるよう取り組んでいきたいと思いました」

これらの記述は、約400編におよぶレポートのごく一部である。このほか、会場で来場者にご記入いただいたアンケートもある。『大・南大萱展』は、当初考えていた以上に大きな成果をあげたと信じている。

止